

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2010

課題番号：20243013

研究課題名（和文）国際体制変動のジェンダー・ダイナミクス

研究課題名（英文）Gender Dynamics of International Regime

研究代表者

竹中 千春（TAKENAKA CHI HARU）

立教大学・法学部・教授

研究者番号：40126115

研究成果の概要（和文）：

ジェンダー研究の提起した概念や理論を導入し、国際政治学・国際関係論の再構築をめざすプロジェクトである。グローバリゼーションの波を被る国家や社会、および「国際体制（International Regime）」の変動について、成熟社会・成長社会・危機社会における政治過程と政治現象の事例分析をもとに、現代世界における「ジェンダー・ダイナミクス（gender dynamics）」を分析した。

研究成果の概要（英文）：

This project aimed to deconstruct and reconstruct International Politics and International Relations, referring to analytical concepts and theoretical frameworks of Gender Studies. We have analyzed states and societies at various stages of development from gender perspective and proposed a hypothesis of “gender dynamics” of International Regime.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	9,400,000	2,820,000	12,220,000
2009年度	8,400,000	2,520,000	10,920,000
2010年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
年度			
年度			
総計	23,100,000	6,930,000	30,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：グローバル・イシュー、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

（1）国際政治学・国際関係論におけるジェンダー研究：国際政治学・国際関係論において、ジェンダー的な分析が盛んになったのは冷戦後、1990年代以降といえる。75年以降の世界女性会議の開催、80年代からの女性差別撤廃条約の推進、90年冷戦後の武力紛争における「女性に対する暴力」への注目を経て、国際開発・民主化・和平構築を中心に、ジェ

ンダー分析は国際政治に不可欠なものとなってきた。*Gender in International Relations: Feminist Perspectives on Achieving Global Security*, New York: Columbia University Press, 1992) の著者 Ann J. Tickner, が、21世紀に入って ISA (International Studies Association) 会長を務めたことも、そのような流れを象徴している。

(2) **日本の潮流**：日本の国際政治学・国際関係論も、そうした流れを汲み取り、ジェンダー研究を取り入れる学際研究を進めてきた。日本国際政治学会では 2001 年度研究大会部会 1「ジェンダー秩序の再編」、2005 年度研究大会で部会 1「テロ後の世界とジェンダー」、2006 年度研究大会部会 1「グローバル・ガバナンスへの胎動：地雷・環境・ジェンダー」を開催し、2006 年度にはジェンダー分科会を発足させた。こうした動きを受け止めて、分析概念や理論仮説として本格的に提起する段階を迎えていた。

2. 研究の目的

(1) **ジェンダー研究と国際政治学・国際関係論の理論的な接合**：国際政治学・国際関係論にジェンダー分析を組み込み、学問体系の分析概念・理論仮説を批判的に再構築する。

(2) **国際政治的な現象についてのジェンダー的な事例分析**：(3) (4) (5) の事例分析をもとに、国際体制変動、市場経済とグローバリゼーション、冷戦後の紛争、移民・難民の増加、人権問題などをめぐるジェンダー現象を分析し、理論的に考察する。

(3) **先進民主主義国を中心とした「成熟社会」のジェンダー的な事例分析**：世界的な比較の中で「安全」と「豊かさ」、さらに民主主義制度の下で女性の自由と参加が許容されている社会と国家におけるジェンダー現象を分析し、理論的に考察する。

(4) **新興工業国を中心とした「成長社会」のジェンダー的な事例分析**：急速な経済成長を続ける中国・韓国・東南アジア小国・インドなどにおけるジェンダー現象を分析し、理論的に考察する。

(5) **紛争後地域を中心とした「危機社会」のジェンダー的な事例分析**：「安全」と「豊かさ」を欠き、武力紛争や災害による飢饉などを経験している社会と国家におけるジェンダー現象を分析し、理論的に考察する。

3. 研究の方法

(1) **国際政治学・国際関係論・比較政治学に応用するジェンダー分析の概念と指標**

国連開発計画 (UNDP) は A・センの理論に基づいて、自由と平等を測定する指標として、平均寿命・教育水準・国民所得をもとに人間開発指数 (HDI: Human Development Index) と、男女間格差 (平均寿命、初等・中等・高等教育の総就学率、勤労所得等の格差) を考慮したジェンダー開発指数 (GDI: Gender Development Index)、女性の社会参加につい

て稼働所得割合、専門職・技術職・管理職に占める女性の割合、国会議員に占める女性の割合をもとにジェンダー・エンパワーメント測定 (GEM: Gender Empowerment Measure) を示している。本研究では、こうしたジェンダー分析の概念を応用し、ジェンダー的な社会状況とそれと関連する政治的なダイナミクスを捉える鍵概念として、4つの指標を提起した。

ジェンダー・ダイナミクスの4つの指標

安全保障 (security)	豊かさ (affluence)
参加 (participation)	アイデンティティ (identity)

4つの指標の間には相関関係がある。「安全保障」と「豊かさ」は強く相関し、豊かな社会は安全で女性を含めた人間の平均余命が長く、貧しい社会では「安全保障」が不十分で平均余命が短い。民主主義やその自由度を測る「参加」は、「安全保障」と「豊かさ」の満たされた社会で高く、危険で貧しい社会は、仮に民主的な制度が存在していても、実質的な「参加」は低い傾向がある。また、安全で豊かで女性の参加が保証された社会ほど、ジェンダー的な「アイデンティティ」は個人が自由に表出できるものであり、危険で貧しく女性の参加が低い社会では、それが親族・地域社会・宗派・国家などの集団によって社会的に統制される傾向がある。これらの指標の相関関係の多様性を踏まえ、国際協力や地域や各国の国家と社会の状況をジェンダー的に捉え、分析した。

(2) **ジェンダー的な分析に基づく国際体制変動についての理論仮説の検討**

ジェンダーに注目した国際政治・国際関係・比較政治について、以下のような社会的カテゴリーに参照しつつ、事例分析を行い、理論仮説の提示を検討した。

① (4つの指標値の高い) **先進民主主義国の国際体制変動とジェンダー・ダイナミクス**：女性の参加の増大、選挙と女性指導者、高齢化と少子化、移民労働者問題、新自由主義的な政策の下での社会福祉、移民排斥ナショナリズム、宗教的ファンダメンタリズム、EUなど地域統合との関連、アメリカや日本との比較、ジェンダー的暴力と人権問題など。

② (4つの指標値の低い) **開発途上国の国際体制変動とジェンダー・ダイナミクス**：民主主義の定着と女性の参加、選挙と女性指導者、移民送り出し国、市場経済と開発経済、人身売買、武力紛争、ジェンダー的暴力と人権問題、排外主義的ナショナリズム、宗教的ファンダメンタリズム、中心工業国や BRIC

s とアフリカなどの最貧困国の比較、国連や国際機関、先進国政府、NGOs などの国際協力など。

③ **グローバル・イシューとしての国際体制変動とジェンダー・ダイナミクスと理論的考察**：①②を結びつけながら、移民・難民、人身売買、子どもの虐待、海外協力と NGO などグローバル・イシューとしてのジェンダー現象を捉え、国際体制変動論としてジェンダー・ダイナミクスを捉える。

4. 研究成果

(1) 研究成果のとりまとめと発信の工夫

本研究では、以下の点に留意して、研究成果のとりまとめと発信を行った。

① 個性豊かな研究分担者・研究協力者が数多く集うプロジェクトとして、各自の発想を生かす研究成果のとりまとめと発信を支援するとともに、研究代表者として全体を束ね、より総括的で共同の研究成果のとりまとめと発信を行うように務めた。

② 研究分担者・研究協力者が、中間段階ととりまとめの段階において、問題関心、研究方法、分析上の仮説などを共有するために、できるだけ多くのメンバーが参加できる合宿を行い、十分な全体会議の時間を確保した。

③ 研究成果のとりまとめと発信については、より効率的で広範囲の方々に届くように、新しい方法に朝鮮史、多様な媒体・形式・言語で行うように務めた。

(2) 海外での現地調査と情報収集

ヨーロッパ・アジア・アフリカなど、多様な地域や国家を対象とする地域研究者や国際政治学・国際関係論・比較政治学の専門家が集う組織であったことから、各グループおよび各自が現地調査と資料やインタビューを含む情報収集を積極的に行った。研究代表者が南アジア地域研究を専門とするため、2008年8-9月と2009年2-3月にネパール(首都カトマンズと西部地域)、2010年2-3月インド(首都ニューデリーとアッサム州)において、研究成果を報告して現地の研究者との交流をはかる国際シンポジウムの開催とともに、グループでの海外調査を実施した。

(3) 国際シンポジウム・研究会の開催

① 以下のように、日本国際政治学会・日本比較政治学会・アジア政経学会の研究大会においてジェンダーをテーマとする分科会・部会を開催して、本プロジェクトのメンバーの研究成果を公開し、参加者との専門的な学術交流を行った。

・アジア政経学会 2008 年度東日本大会 (2008年5月24日、東京外国語大学にて) 共通論題 I 「ジェンダーの視点から見た現代アジア」

・アジア政経学会 2008 年度全国大会 (2008年10月11日、神戸学院大学ポートアイランドキャンパスにて) 国際セッション「グローバル・チャイナ移動する人々の動かす中国」

・日本国際政治学会 2008 年度研究大会分科会 (2008年10月24日、筑波国際会議場にて) ジェンダー I : 「平和構築・民主化・ジェンダー」

・日本国際政治学会 2009 年度研究大会分科会 (2009年11月8日、神戸国際会議場にて) ジェンダー : 「ジェンダーをめぐるローカル・ポリティクスとグローバルポリティクス」

・日本国際政治学会 2010 年度研究大会分科会 (2010年10月30日、札幌コンベンションセンターにて) ジェンダー : 「ジェンダーの国際政治」

② 以下のように、国際シンポジウムを開催し、日本を拠点する共同研究でありながらも、国際的な学術交流と成果発信に努めた。

・国際シンポジウム「新しいネパール」2008年10月17日、明治学院大学白金キャンパスにて開催

・国際シンポジウム「ネパール平和と民主主義への道」2008年10月18日、立教大学池袋キャンパスにて開催

・国際シンポジウム “Workshop of Women Journalists and Public Intellectuals Concerned on South Asia: “From Women in Conflicts to Women in Peace and Democracy” 2009年2月27日~3月1日 カトマンズ (ネパール) にて開催

・国際シンポジウム「アジアの市民社会と女性のエンパワーメント」2010年2月22日立教大学池袋キャンパスにて開催

・国際シンポジウム “Exchange Seminar on Gender, Violence and Politics” 2011年3月1日、アッサム州グワハティ (インド) にて開催

(4) ジェンダー特集の企画・編集・執筆

研究組織の各自が、それぞれの論文を学会誌や単行本で執筆し、ヨーロッパ、アジア、アフリカなどの地域研究分野での編著にジェンダーをテーマとした論文を寄稿するだけではなく、ジェンダー研究を国際政治学・国際関係論・比較政治学などの専門領域における一つの柱とするために、学会誌においてジェンダー特集を企画し、本研究のメンバーが編集・執筆を行った。具体的には以下の通りである。

① 日本国際政治学会『国際政治』161号 (2010年8月) 「ジェンダーの国際政治」

② 日本比較政治学会 2011 年度年報『ジェンダーと比較政治学』(ミネルヴァ書房、2011年

6 月刊行予定)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 46 件)

- ① 中田瑞穂、EU のジェンダー平等政策と国内ジェンダー・パラダイム—チェコ共和国を事例に—、日本比較政治学会年報『ジェンダーと比較政治学』、査読有、13 号、2011、101-133
- ② 竹中千春、国際政治のジェンダーダイナミクス—戦争・民主化・女性解放—、日本国際政治学会編『国際政治』、査読有、161 号、2010、11-25
- ③ 柄谷利恵子、女性移住労働者をつくる—英国における能力別受け入れ制度をめぐる政治、日本国際政治学会編『国際政治』、査読有、161 号、2010、26-40
- ④ 小川有美、ノルウェーによるグローバル環境・ジェンダー政治の転換—ブルントランの魔法だったのか、日本国際政治学会編『国際政治』、査読有、161 号、2010、54-67
- ⑤ 田村慶子、ジェンダーの国際政治、日本国際政治学会編『国際政治』、査読有、161 号、2010、1-10
- ⑥ 小嶋華津子、定年退職年齢の性別格差是正をめぐる政治—中国におけるジェンダーと政治—、日本国際政治学会編『国際政治』、査読有、161 号、2010、82-96
- ⑦ Yasushi KATSUMA、Global health governance for combating infectious diseases、*The United Nations Studies* (国連研究)、査読有、11 号、2010、47-66
- ⑧ 津田由美子、連邦制と福祉国家—ベルギー社会保障政策の分権化の議論から—、地域総合研究、査読無、3 号、2010、171-177
- ⑨ 合場敬子、女子プロレスラーの怪我と痛み、スポーツとジェンダー研究、査読有、8 号、2009、18-74
- ⑩ 竹中千春、総選挙後のインド政治—諦めない民衆、現代インドフォーラム、査読無、7 月号 No. 2、2009、11-18
- ⑪ 森本泉、「カースト社会」における浄—不浄関係とその実践—ネパールの楽師カースト・ガンダルバを巡って、人権と部落問題、査読有、774 号、2008、64-69

[学会発表] (計 48 件)

- ① 勝間 靖、世界から貧困をなくすために私たちは何をすべきか—市民、NGO、企業の立場からミレニアム開発目標への貢献を考える、国連シンポジウム『あと 5 年、どうなるミレニアム開発目標』、2011 年 2 月 19 日、JICA 地球ひろば (東京)
- ② 磯崎 典世、韓国の市民社会と東アジア共

同体—市民社会は国境を越えるか、東京大学情報学環現代韓国センター主催国際シンポジウム「東アジア共同体と日韓の知的交流」、2010 年 10 月 2 日、東京大学駒場キャンパス (東京)

- ③ 網谷龍介、戦後ドイツにおける政党間競合と言説戦略—予備的考察—、日本比較政治学会、2010 年 6 月 20 日、東京外国語大学 (東京)
- ④ 田村慶子、女性はいつ政治に登場するのか：東南アジアの事例、アジア女性研究交流フォーラムシンポジウム、2010 年 5 月 28 日、アジア女性交流研究フォーラム (北九州市)
- ⑤ 中田瑞穂、経済発展、市民社会、及び民主制の型をめぐる、日中韓共同研究「東アジアにおける民主化と開発」シンポジウム、2010 年 2 月 20 日、名古屋大学 (愛知)
- ⑥ 戸田真紀子、女性の語りから読み解く社会 (5) 教育現場と保護者の声、日本アフリカ学会、2009 年 5 月 24 日、東京農業大学 (東京)
- ⑦ 津田由美子、ベルギーの多文化政策と移民問題、日本政治学会、2008 年 10 月 12 日、関西学院大学 (兵庫)

[図書] (計 40 件)

- ① 田村慶子・清水一史・横山豪志、ミネルヴァ書房、東南アジア現代政治、2011、259 頁
- ② 網谷龍介、ナカニシヤ出版、田村哲樹・堀江孝司編『模索する政治—リベラル・デモクラシーと福祉国家の行方』、2011、368 頁 (319-341)
- ③ 竹中千春、有志舎、盗賊のインド史—帝国・国家・無法者 (アウトロー)—、2010、337 頁
- ④ 津田 由美子、東京大学出版会、馬場康雄・平島健司 (編) ヨーロッパ政治ハンドブック (第 2 版、2010、346 頁 (180-194))
- ⑤ 竹中千春、有信堂、東アジアの国際関係—多国間主義の地平、2009、262 頁 (97-122)
- ⑥ 勝間靖・内田孟男、国際書院、平和と開発のための教育—アジアの視点から、2010、154 頁
- ⑦ 戸田真紀子・勝間靖・初瀬龍平・松田哲、御茶の水書房、国際関係のなかの子ども、2009、267 頁
- ⑧ 竹中千春・高橋伸夫・山本信人、慶應義塾大学出版会、現代アジア研究 2—市民社会、2008、381 頁 (9-27)
- ⑨ 田村慶子、明石書店、シンガポールを知るための 62 章、2008、275 頁
- ⑩ 戸田真紀子、御茶の水書房、アフリカと政治—紛争と貧困とジェンダー—わたしたちがアフリカを学ぶ理由、2008、212 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹中 千春 (TAKENAKA CHI HARU)
立教大学・法学部・教授
研究者番号：40126115

(2) 研究分担者

網谷 龍介 (AMIYA RYOSUKE)
明治学院大学・国際学部・教授
研究者番号：40251433

磯崎 典世 (ISOZAKI NORIYO)
学習院大学・法学部・教授
研究者番号：30272470

戸田 真紀子 (TODA MAKIKO)
京都女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：40248183

田村 慶子 (TAMURA KEIKO)
北九州市立大学大学院・社会システム研究科・教授
研究者番号：90197575

小川 有美 (OGAWA ARIYOSHI)
立教大学・法学部・教授
研究者番号：70241932

中田 瑞穂 (NAKADA MIZUHO)
名古屋大学・法学政治学研究科・教授
研究者番号：70386506

津田 由美子 (TSUDA YUMIKO)
獨協大学・法学部・教授
研究者番号：30247184

合場 敬子 (AIBA KEIKO)
明治学院大学・国際学部・准教授
研究者番号：50298056

森本 泉 (MORIMOTO IZUMI)
明治学院大学・国際学部・准教授
研究者番号：20339576

小嶋 華津子 (KOJIMA KAZUKO)
筑波大学・人文社会科学研究科・講師
研究者番号：00344854

柄谷 利恵子 (KARATANI RIEKO)
関西大学・政策創造学部・教授
研究者番号：70325546

勝間 靖 (KATSUMA YASUSHI)
早稲田大学・アジア太平洋研究科・教授
研究者番号：80434356

(3) 研究協力者

浪岡 新太郎 (NAMIOKA SHINTARO)

明治学院大学・国際学部・准教授
研究者番号：40398912

中村 文子 (NAKAMURA AYAKO)
東北大学・国際高等研究教育機構・助教

河本 和子 (KAWAMOTO KAZUKO)
早稲田大学・政治経済学術院・助教

木村 真希子 (KIMURA MAKIKO)
明治学院大学・国際平和研究所・助手

中村 唯 (NAKAMURA YUI)
独立行政法人国際協力機構(JICA)・専門調査員

小倉 清子 (OGURA KIYOKO)
ネパール在住フリージャーナリスト

サンギータ・ラマ (Sangeeta Lama)
ネパール在住フリージャーナリスト

アニー・ダンダヴァティ (Annie Dandavati)
ホープカレッジ(米国)・教授

ウルバシ・ブタリア (Urvashi Butalia)
Zubaan(Feminist 出版社、デリー)・編集長

パメラ・フィリポーズ(Pamela Philipose)
Indian Express 紙(デリー)・編集者